

2020年の 中東地域で

いまさまざまな分野で課題を抱える中東諸国。それを解決するためのJICAの取り組みや、日本企業の活躍を紹介する。
文●光石達哉

現地で活躍する 日本企業

イラク インフラ整備で復興を後押し

案件名 バスラ製油所改良事業
借款契約署名：2012年10月(第一期)、2019年6月(第二期)

イラクは世界第5位の原油生産量を誇る産油国だ。しかし、たび重なる戦争やイスラム国(IS)の侵攻などによって国内の多くの石油施設が破壊され、あるいは改修されずに老朽化が進んでいる。ガソリンや軽油等を精製するための石油施設が十分な能力を発揮できず、石油製品の大半を輸入に頼る状況が続く。

国内の石油製品増産を目指すイラクは、JICAの協力のもとに国内最大級のバスラ製油所の改良・増設を決定した。高品質で現代の環境基準にも合う石油製品を生産し、経済復興を後押しするものだ。建設工事のピーク時には、約1万5,000人の作業員がプロジェクトに従事する。高い失業率が課題であるイラクに雇用を生み出す点でも、イラク側の期待は高い。プロジェクトのリーダーを務める日揮グローバルの水谷暢良さんは、「イラクでは1970年代に日本企業が建てた施設が今も稼働しており、日本が作るものは高品質で長持ちすると期



1970年代に日本企業が建設したバスラ製油所。建設工事は来年前半から。2025年に完成予定だ。

待されています」と語る。

プロジェクトの鍵は「人の輪」であるという水谷さん。コロナ禍で現地での協議はできなかったものの、連日のオンライン協議を重ねて当初の予定を維持し、契約締結にこぎつけた。計画段階から10年、このプロジェクトに関わるイラク側の責任者イブラヒムさんの熱量に動かされているという。「イラクの方々には素朴で仕事熱心で親しみが湧きます。彼らとともに、この国の復興に一役買いたいという気持ちがあります。ますます高まっています」。



バグダッドの共和国宮殿で行われた契約調印式。石油大臣が出席するなど、イラクの期待の大きさが感じられた。

イラク側の責任者であるイブラヒムさんは、「このプロジェクトは私の息子、君たちは家族だ」と情熱を持って取り組まれています。私たちが人の輪を大切に組みます。



バスラ製油所事業の責任者を務めるイラク石油省南部精製公社副総裁のイブラヒムさん(中央)と水谷暢良さん(右)。



10月から試運転を開始した新造船。水深1,500mまでの海底の地形や海水の成分などを調べる海洋調査船の機能も持ち、海洋環境が水産資源に及ぼす影響も探っていく。

モロッコ 海洋漁業を支える新たな調査船

案件名 海洋・漁業調査船建造事業 2017年1月～2022年1月



モロッコ国立漁業研究所の船員が、研修で採取したサンプルを乾燥させるオープン型の使い方を学ぶ様子。新造船は「以前に比べて船内が広くなり、使いやすくなった」と好評だ。

新造船には推進機関としてディーゼルエンジンが搭載されています。現地での扱いやすさやランニングコストなどを考え、モロッコ側の意向でこれが採用されました。



三井E&S造船はインドネシアで防災船建造などの実績もある。左から二人目が石田毅さん。

モロッコは大西洋に面した国で豊かな漁場を持ち、日本へもタコ、イカ、マグロなどを輸出するなど水産業は重要な産業になっている。しかし2000年以降、気候変動などの影響で漁獲量が不安定になり、過去に日本が無償資金協力事業で整備した漁業調査船も老朽化が進んでいたこともあり、水産資源を十分に調査できずにいた。

そのためモロッコ国立漁業研究所(INRH)は、円借款により豊田通商を介して、三井E&S造船・玉野艦船工場(岡山)で新たな海洋・漁業調査船を建造することを決定した。調査船は音波を使って魚群を探索するが、船から発生する音や振動が影響して高精度な探索ができないことがある。そこで新造船では日

本特有の高度な技術を用いて、水中騒音を低減している。

「これは日本の造船能力を高く評価するモロッコが強く望んでいたものでした」と話すのは、三井E&S造船の石田毅さん。新造船は2020年の6月に進水式が行われ、現在は試運転が続けられている。

「コロナ禍のなか、外務省や国土交通省のご尽力もあり、INRHの船員に来日していただきました。船の性能確認や機器の操作に習熟する研修を受けてもらっています」

12月中にも新造船は日本からモロッコに向けて出航する予定で、来年からは国際観光都市アガディールを母港にして、さまざまな調査に活躍することが期待されている。

エジプト 実践的な学びで 若者たちに未来を

案件名 エジプト日本科学技術大学(E-JUST*)プロジェクト フェーズ3 2019年1月～2024年1月
人材育成事業(エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP*)) 2017年5月～2024年12月
*1 Egypt-Japan University of Science and Technology (E-JUST)
*2 Egypt-Japan Education Partnership (EJEP)



2019年11月に開所した新キャンパス。工学系および国際ビジネス・人文系大学院に226名、工学部および国際ビジネス・人文学部に618名、合計844名が在籍している。

2010年にエジプト・日本両国政府の二国間協定により設立されたのが、エジプト日本科学技術大学(E-JUST)だ。エジプトの多くの大学は学生数の増加により座学中心の詰め込み型の授業が主流だが、E-JUSTでは実験・実習を重視する日本型の教育を実践。これまで修士と博士合わせて308人が学位を取得し、卒業生はさらに進学したり、出身大学に教員として戻り、教育・研究活動に従事したりしている。また22年には工学部の最初の卒業生も生まれる予定だ。さらに医師であるゴハリ学長のリーダーシップのもと、新型コロナウイルス対策の研究等を通じ社会への貢献も進んでいる。なお、両政府の協力のもと今後3年間でアフリカ各国から150人の留学生を受け入れる予定で、アフリカ地域における科学技術の拠点としても成長を続けている。

先進国の教育というとパソコンやタブレットが必要とイメージしがちですが、そうした先進技術に頼るだけでなく、与えられた材料や周りがある資源を最大限に活用するという日本の教育の理念が素晴らしいと思います。

現在、日本式教育を取り入れたエジプト日本学校が43校開校し、将来的には200校まで増える予定です。ここで学んだ生徒たちが、いずれは留学制度を活用して日本で学ぶことを期待しています。

一方、16年に結ばれたエジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)の一環として、これまでエジプトからの留学生266人、医師・看護師・教員などの研修生160人が日本で学んでいる。このEJEPのもとでは、夏休みを利用しての短期留学や、約半年から1年間、日本の大学で学びながら単位交換などができる交換留学を通じて学部生にも日本留学の門戸が開かれ、非常に好評である。

エジプト大使館文化参事官のハニー・A・エルシーミーさんは「留学・研修制度を通じてエジプトと日本の大学・病院の間で新たな協力関係が生まれるなど、実り多いものになっています」と、これまでの成果に目を細める。

在日エジプト大使館・文化・教育・科学局のハニー・A・エルシーミーさん(右)とハネム・アハマドさん(左)。お二人とも日本の大学に留学経験がある日本通だ。



地域の魅力を 世界へ

ヨルダン 悠久の歴史を世界へ発信

案件名 ペトラ博物館建設計画 2014年3月～2020年3月
コミュニティ重視型のペトラ地域観光開発プロジェクト 2015年11月～2020年3月

ヨルダン南部にあるペトラ遺跡は、紀元前2～紀元後2世紀に栄えたナバタイ王国の都市遺跡だ。2019年4月、この遺跡の入り口にペトラ博物館が開館した。これに尽力したのがJICA専門家を務めていた大山晃司さん。02年から現地でカラク考古学博物館、ヨルダン博物館など四つの博物館の開館・運営に協力してきた。

ペトラ博物館が特に力を入れるのは、映像やタッチパネルでの展示解説と古代の墓や住居の原寸大復元などを用いたストーリー性のある見せ方だ。

「たとえば、映画『インディ・ジョーンズ 最後の聖戦』にも登場した宝物殿がどういった経緯で造られたかなど、観光客が興味深く学べるような展示を心掛けています」

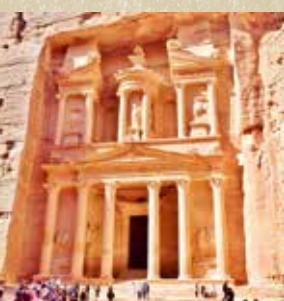
ヨルダンは他国で発生したような「アラブの春」による混乱はなかったものの、周辺国の混乱やイスラム国(IS)の台頭の影響で観光客が減少した。しかし、その後は徐々に回復しつつあり、博物館が開館した19年には約113万人もの観光客がペトラを訪れた。

「ヨルダンはイスラム圏ですが、イスラムが普及する以前にも古い歴史があります。文明の交差点としてローマ帝国や十字軍など世界史の教科書に出てくるような古代文明や歴史とも関わりが深い国です。多くの人に現地へ来ていただいて、その歴史を肌で感じてほしいと考えています」

博物館が力を入れて開発した展示解説。タッチパネル式で観光客も扱いやすい仕様になっている。



地域の住民を巻き込みながら物事を進めることで、多くの人が愛着を持つ施設になりました。こうした地道な協力は日本の強みだと思います。



ペトラ遺跡の宝物殿。

大山晃司さん(中央)。1998年に考古学の青年海外協力隊員としてヨルダンに赴任し、その後も同国で博物館や文化遺産、観光分野の専門家や企画調査員として活躍。



ペトラ博物館の外観。ナバタイ王国時代をはじめ、約3,000年前に王国を築いて聖書に登場するエドム人、西暦106年以降のローマ帝国による支配などペトラの歴史を深く学べる。